

機関番号：14301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720261

研究課題名（和文） 英国東インド会社トンキン商館文書を用いた近世ベトナム史の新研究

研究課題名（英文） A new research on early-modern Vietnam through EIC Tonkin factory records

研究代表者

蓮田 隆志 (HASUDA TAKASHI)

京都大学・東南アジア研究所・研究員

研究者番号：20512247

研究成果の概要（和文）：本研究は、大英図書館が所蔵する英国東インド会社（EIC）トンキン商館文書の分析を通じて、近世ベトナム政治史の解明を目指さんとしたものである。

大英図書館での原文書閲覧とその分析により判明した事実のうち、特に重要なものに、以下のものがある。

（1）EIC のトンキン駐在に於いては、特に初期にはポルトガル語を話せる人材が大きな役割を果たした。

（2）貿易港フォーヒエンには毎年多数のシャム船が入港し、盛んに取引を行っている。また、船長にはフォーヒエンに現地妻を持つ者もいるなど、広く海域アジア全般で見いだされる貿易港の特徴が当てはまる。

研究成果の概要（英文）： This study aims to characterize political history of Vietnam during early modern period through analysis of the English India Company Tonkin Factory Records.

From analyses of original text located in the British Library, many interesting historical facts are uncovered. Two of important facts are:

(1) Person who can use Portuguese take important role for EIC activity in Tonkin, especially in early phase.

(2) Many Simese vessels come to Pho Hien which is the main port in Tonkin to trade. Some captains of these Simese vessels have married with rocal female. This phenomena is broadly observated in Asian port cities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1300,000	390,000	1690,000

研究分野：近世ベトナム史・アジア海域史

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：ベトナム 近世 イギリス東インド会社

1. 研究開始当初の背景

①ベトナム政治史：16～18世紀ベトナム

の政治史は、強大な外敵を打ち破った栄光の記憶を持たないため、一国史観・王朝史観の

強い影響の下、ながらく「衰退期」として等閑視されてきた。

80年代後半以降、A. Reidの「交易の時代論」による国際交易の隆盛が牽引した東南アジア規模での経済発展を重視する議論、日本の学界の「東アジア小農社会論」や、アメリカのV. Liebermanが提起した中・近世の東南アジア大陸部諸国が共通の国家統合のトレンドを有したという提言などを受けて、広域史・比較史の観点から、研究の重要性が大きく高まっている。王朝史観を脱却したベトナム史学界も、90年代後半以降、積極的に当該時期の再評価を進めている。

しかしながら、これまでの研究蓄積の薄さが災いして、中国史や日本史であれば戦前に行われていたであろう主要史料に関わる史料批判すら不十分で、実態解明が大きく立ち後れている。

②史料状況の激変：1990年代にドイモイ（刷新）政策によって外国人の現地調査が可能になったのち、日本のベトナム学界は、桜井由躬雄らの「バックコック村調査」に代表される農村研究をさかんに進め、その中で大量の村落史料（金石文や契約文書、族譜など）が発見された。

これに刺激を受けたベトナム側も村落調査を精力的に展開し、ユネスコなどの資金協力も得て、史料の公刊が進んでいる。一方、文書館所蔵史料についても、漢喃研究院が大部な碑文拓影集の公刊を開始した。これらにより、ベトナム国内所蔵の文字史料は、質量ともに増加したに留まらず、史料自体へのアクセシビリティが大幅に改善した。広島大の上田新也など、日本の若手院生もこれら新出・新規公刊史料を用いた研究を発表し始めている。

欧文史料についても、オランダ東インド会社商館文書を縦横に駆使した Hoang Anh Tuan、アウグスティノ会宣教師のラテン語日記を活用した Olga Dror のモノグラフなどが相次いで上梓され、活発化の兆しが見えている。

このような中、研究代表者は新出史料と欧文史料に加えて、日本史料など東アジアの漢文史料をも総合して宦官の活動の重要性を指摘するなど史実の解明を試みている。

③欧文史料の活用状況：上述のように、欧文史料の活用はとくに 2000 年代以降進んでいる。

近年、ベトナムの歴史学界はヨーロッパ製地図史料の検討や考古学的発掘と併せて、商館や商業拠点の位置特定など基礎的作業が開始され、盛んな論争が行われている。しかし、史料自体の性格を反映して、イエズス会など宣教師関連史料は宗教史や社会史、オラ

ンダ商館文書は経済史・商業史の材料としての活用が殆どである。

実際は、許認可の獲得など様々な場面で政治と商業や布教は密接な関係を有しており、欧文史料には政治史に関する情報も豊富に含まれているのである。研究代表者も既往研究で欧文史料に含まれる政治史的情報の活用を始めている。

## 2. 研究の目的

### ①何を明らかにするのか

近20年のベトナム内外での史料状況改善とそれによる研究成果の蓄積を踏まえ、本研究はこれまでベトナム史研究で殆ど利用されてこなかった英国東インド会社トンキン商館文書の活用を図る。

欧文史料のうち、宣教師関連史料はポルトガルやイタリアなど複数国にまたがって所蔵されており、閲覧にも制限がある。かたやオランダ東インド会社トンキン商館文書はその膨大な量ゆえに、少なくとも一度は年単位でオランダに滞在して調査しない限り、全面的な活用は難しい。

これに対して英国東インド会社文書のトンキン商館文書は商館自体の存続期間の短さもあって、短期滞在でも全容を把握できる量であり、かつこれまで殆ど活用されてこなかった。また言語障壁も宣教師史料やオランダ語史料に比べればかなり低く、短期間の文書館調査でも十分な成果を上げることが期待される。

本研究では、これまで政治史の解明に殆ど用いてこられなかった当該文書の読解を通じて、17世紀ベトナム史の政治過程の復元を目的とする。また、復元された政治過程やこの歴史的事実を「研究開始当初の背景」欄の①にて述べたより広域・通時的な文脈の中に位置づけることを目指す。これによって世界史的近世の文脈の中に、17世紀ベトナムを位置づける端緒が得られると考える。

### ②特色と意義

・近世ベトナム政治史の革新：当該時期のベトナム政治史は、史料的困難もあって、「史実の提示」というもっとも基本的な部分で朝鮮史などと比べてもはるかに低レベルなものに留まらざるを得なかった。しかし、世界規模での銀の流れとそれに後押しされた商業ブームへの対応が、東・東南アジアの諸政体・諸地域の命運を左右したことが指摘されるなど、もはや通地域的な共時性への理解を抜きにしては一国史すら語れない状況になっている。政体の壁を越えて広域に活動した欧州人が残した史料の活用は、増加するベトナム国内史料の分析にのみ耽溺してもベトナム史は見えてこないことを明らかにするだろう。

また、本研究は小規模ながら、ベトナム史というマイナー後発研究分野の底上げにとどまらない意義を持つ。欧文史料をより多く活用する、島嶼部東南アジア史の研究や日本の対外関係史研究とも連携することによって、「漢字の史料がある」という一点にのみ依拠してベトナム「にも」手を出すような研究に対して、ベトナム側から実証的な対論を提供することが可能になる。

・多史料時代のベトナム史研究：ベトナム国内で発見・公刊が進展している史料は、村落史料が中心で、寺院への寄進碑などから宮中での序列や新たな登場人物の存在は分かって、序列自体の成立過程や政争の具体的推移、そこでの各個人の役割といった情報はその性格からして殆ど期待できない。

欧文史料はこれらを補完する情報があるものの、人名・地名などが当時の口語ベトナム語での呼称（地位や称号に由来するあだ名的呼称や俗称が多く、本名・漢字地名では殆ど登場しない）をそのまま写したものが多く、そのまま漢文史料の持つ情報と対照しても得られるものは少ない。漢文史料の文脈とベトナム語そのものについての知識を踏まえた上で対照することで、はじめて2つの史料の有益な接合が実現する。

本研究は単なる新規史料の渉猟による情報の上積みではなく、史料の公刊が進展する中で、性格の異なる複数の史料をどのように組み合わせるべきかという、方法論上の革新をも視野に入れている点で新しい。

### 3. 研究の方法

研究対象：商館文書を読解して、その結果を政治史の解明に活用すると言うだけでは漠然としている（しかし当該史料が何についての記述が詳しく、何についての記録が少ないのかといった、史料の一般的性格についての解説は皆無に近い）。そこで本研究は全体像の把握を目指しつつも、

(A) 後継者争いなどの政変の推移と登場人物の把握

(B) 宦官の具体的政治活動

の2点に注目する。(A)については、既存の漢文年代記は政争の勝者が編纂したものであるため、その偏向は疑いを入れず、これを補完する意義は極めて大きい。

(B)は政権の中核にいながらも漢文史料からはその活躍が殆ど見えず、外国史料との対照が不可欠であることを研究代表者自身が既往研究にて明らかにしている。本研究ではさらなる事例の上積みと宦官の活動の多様性を解明する。

### 4. 研究成果

本研究にを通じて会社と王族・宦官との具体的交渉過程やオランダ東インド会社との関係、通訳の活動などが具体的に判明した。

また、大英図書館所蔵のフランス語書籍も一部調査をおこなってマイクロフィルムからの紙焼きの形で入手した。そのなかには日本の公的機関が所蔵していない文献（Marini, *Histoire nouvelle et curieuse des royaumes de tonquin et de lao.*）も含まれており、今後の活用が期待できる。

本研究によって明らかとなった新知見として、主なものとして以下のものが挙げられる。

①イギリス東インド会社のトンキン駐在に於いては、特に初期にはポルトガル語を話せる人材が大きな役割を果たした。これは既に一部で指摘されていた、ポルトガル語が南シナ海世界における共通語としての役割・重要性が、インドシナ半島東岸においてももしか非カトリックの西洋人が関わる場合においても確認されることを意味している。

今後は布教史や直接ポルトガルが関わったマカオやマラッカ、日本貿易など以外の場面においてもポルトガル語を用いた既往研究を参照する必要があるだろう。

②フォーヒエンには毎年多数のシャム船（船長の民族的属性ははっきりしないことが多い）が入港し、盛んに取引を行っている。また、シャム船船長にはフォーヒエンに現地妻を持つ者もいるなど、広く海域アジア全般で見いだされる貿易港の特徴が当てはまる。

さらに、シャム船は当地でイギリス東インド会社とも貿易を行い、金銭貸借などをめぐって紛争も発生している。現地の地方官署・現地有力者は要請に応じてトラブル解決に動くものの、基本的に積極的な介入を好まなかった。

③EICは表面上、オランダ東インド会社の動向に気を配っていたが、同時にバンナム宛の手紙をオランダ船に託すなど、協力関係も結んでいた。

④サミュエル・バロンが駐在していた時期の北部ベトナムの政情に関する記事は、彼の著作である *Description of the Kingdom of Tonqueen* (1685) と細部の表現にいたるまでかなり似通っており、商館文書にオリジナルな情報はそれほど多くない。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計2件）

①蓮田隆志「ハータイン村文書の初歩的考察よりみる国家と村落の関係」ベトナム・フェ研究最前線 一周辺集落研究からの視点一、2010年7月11・12日、関西大学。

②Hasuda, Takashi. “Waterway Control and Coastal Village in Central Vietnam during The Seventeenth and Eighteenth Centuries” . CAPAS-CSEAS 2009 International Symposium on Maritime Links and Trans-nationalism in Southeast Asia: Past and Present, 28 Oct. 2009, Academia Sinica, Taiwan.

〔図書〕（計 2 件）

①歴史学研究会（編）『世界史史料 4 東アジア・内陸アジア・東南アジア II』岩波書店、2010 年 11 月（項目執筆 3 件）

②歴史学研究会（編）『世界史史料 3 東アジア・内陸アジア・東南アジア I』岩波書店、2009 年 12 月。（項目執筆 3 件）

〔その他〕

ホームページ等

[http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/staff/hasuda/hasuda\\_ja.html](http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/staff/hasuda/hasuda_ja.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

蓮田 隆志 (HASUDA TAKASHI)

研究者番号：20512247

### (2) 研究分担者

なし

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし

研究者番号：